2	耕作放棄地の解消に向けた集落ぐるみでの放牧活動
	ゆずりお牧場（滋賀県東近江市杠葉尾町）

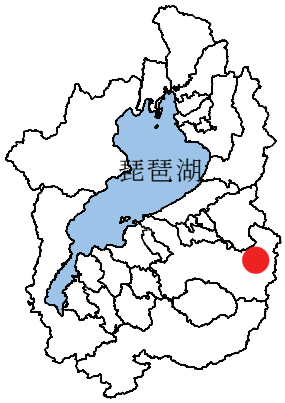
キーワード
- 過疎化・高齢化が進む中山間地域での取り組み
- 野生獣の追い払いと耕作放棄地の保全･再生に向けた取り組み
- 集落ぐるみでの放牧の取り組み

１　地域の概要

東近江市は琵琶湖の東に広がる湖東平野の中央に位置し、市域の22％（山林を除いた面積の51％）が水田で、農業粗生産額では主要農産物の米が約６割を占めており、野菜や乳用牛（生乳）の生産がそれぞれ約１割でこれに続いている。

杠葉尾集落は同市を流れる一級河川愛知川の上流、鈴鹿山系の麓に位置する山間農業地域で水稲のほか、寒冷な気候を活かし茶や花きなどが栽培されている

また、同集落では農業のほか、愛知川の清流を活かした養魚場やキャンプ場などの観光も主要な産業の１つとなっている。



２　取組の経緯

杠葉尾では過疎化の進行により昭和50年から平成12年までの25年間で集落の農用地や農家戸数が半減した。

このため、平成12年から実施された中山間地域等直接支払交付金制度を活用し、農用地の保全は図られてきた。

しかし、近年、集落の過疎化や高齢化の進行に加えて、シカ・イノシシなどの野生獣による農作物被害などから、耕作をあきらめる農地が目立つようになり、集落活動も停滞するといった問題が発生していた。

そこで、地域に適した獣害対策方法等について集落と行政（滋賀県・東近江市）とが検討を進めてきた結果、平成18年度より集落農業者らで組織される「杠葉尾村づくり委員会」が中心となって、野生獣の追い払いや集落景観の保全･再生、さらには地域農業の振興を目標に、野生獣の出没経路である山沿いの耕作放棄地での和牛放牧に取り組んでいくことになった。

	1975年 農業ｾﾝｻｽ	2000年 農業ｾﾝｻｽ	備考
耕地面積	１４．２ha	６．２ha	
農家戸数	５６戸	２１戸	

【集落点検地図の作製状況】

【畜産の専門家が出席しての集落検討会】

３　放牧の概要

平成18年３月、雪解けと同時に山沿いの耕作放棄地約1.3haを簡易な電気柵で囲い、カヤの芽吹きを待って５月より滋賀県畜産技術振興センターの繁殖和牛２頭を借り受け放牧が開始された。

牧場開きでは放牧地を「ゆずりお牧場」と命名され、子どもたちは和牛に愛称を付けるなど、集落あげての歓迎となった。

放牧後は「ゆずりお牧場」が住民の散歩コースとなったり、和牛の様子が集落で共通の話題となるなど地域コミュニティー意識の醸成にも役立っている。

放牧中の飼育管理は「杠葉尾村づくり委員会」を中心に日替わり制で牛当番が決められ、エサやりや施設の点検が行われるなど、多くの住民が参加して行われている。

平成18年当時、放牧地は長期間の耕作放棄からカヤが密生して繁茂しており、植生が放牧に勝る状況であったため、８月から新たに２頭を加え、カヤを食べ尽くす11月末までの４ヵ月間は４頭で放牧が実施された。

その結果、平成19年度はカヤの生育が抑制され、「ゆずりお牧場」が夏場でも美しい放牧地となり、地域に親しまれている。

次年度は新たに放牧地を拡大し、牛を転牧させながら、耕作放棄地の保全と野生獣の追い払を進めていく予定となっている。

【牧場開き】

【放牧取り組み前：平成17年10月】

【放牧２年目：平成19年10月】

４　放牧の効果

杠葉尾集落では和牛放牧により次のような効果がみられている。

○長年耕作放棄されていた農地が保全され景観が著しく改善された。
○周辺の農地において野生獣による農作物被害が減少した。
○高齢者の活躍の場を提供するとともに、特色のある取り組みから新聞報道などでも多く取り上げられることとなり、地域活力の向上が図られた。
○牧歌的な風景や家畜とふれあうことにより心が安らいだり、家族や集落での話題づくりなどにも効果がある。

今後、放牧を継続することにより営農や畜産振興面での効果も発現できるよう関係機関と連携しつつ集落活動の活性化を推進していきたいと考えている。

執 筆 協 力・問い合わせ先
滋賀県東近江地域振興局田園振興第一課　佐野
Ｔ　Ｅ　Ｌ：　0748－（22）－7723